特43
63

091276-001-4

特43-63

浜辺の荒涛

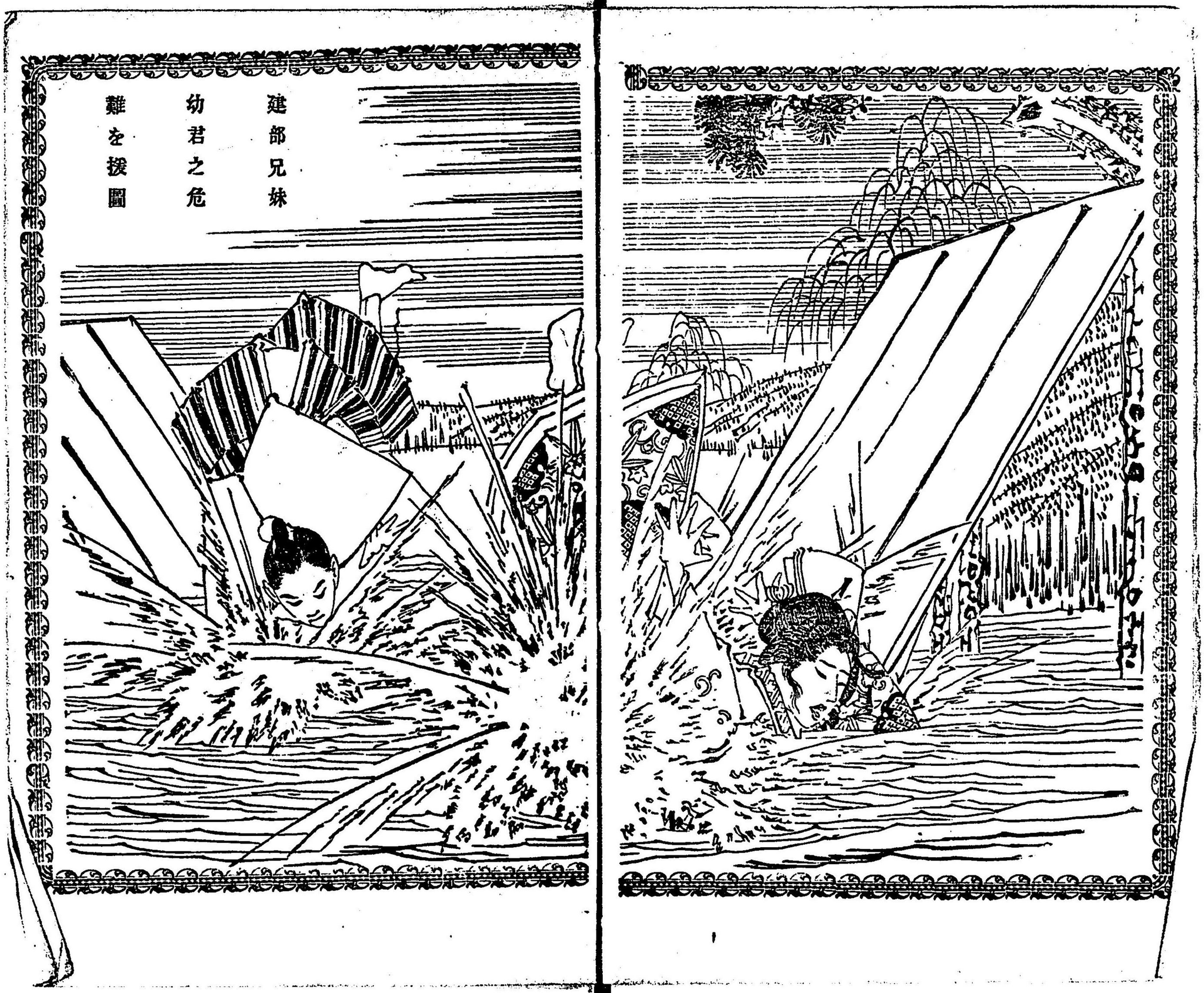
覚張　栄三郎／刊

M19
DBN-2134

特43
63

○濱邊の荒濤序

逆臣佞計を逞らして主家を囹圄倦せんと企て及ぶも離つて刑場の露と鮮る亡人となり忠臣時に精忠を貫徹するの千差万別なる其顛末を忽ち起し忽ち訖しぬるも稗史に倚らざるを得んや然れども漸次開化の道中に進む中へ古説を現はすに少し反對に思へと是れ將た彼の臨機應變古くを先頃文明の囃哉に音添て濱邊の荒波の顛末を因む中島座が演ずたる活歴史の評判も彌高かり


建部兄妹
幼君之危
難を援圖

一實說を洩らして人に知らさぬい本意なき事と思ひつゝこの一冊の梓弓延へて諸君の御覧にと人より思ひも明三閣が利久當算略看客諸君も其お積りで何分永當々々御眷戀玉いらんとを紙書念ずる抔の言葉に似た節を冠せるいみんぞ怪しみ玉ふなかれ

丙戌の夏汐留街僑居中にて

春永情史のぶる

○濵邊の荒濤

其一

人は道を行ふ何事か最も前なる只利義を辨ずるにあり夫れ義い天理の當然にして利は人慾の私あり日用の間一念の發る必ず利を棄て義を取り其利とする處特り富貴を求るも其利応たる事皆同じ故に義理分別の際に於て其機を失へい毫釐を差へて誤るに千里を以てし其害測るべからず豈慎まざるべけんや茲に話說す一編の物語い文久年間の頃かとよ山陰道の其中に思ひたつ矢は石見濵濵邊の鄉の某諸侯い二豎の爲めに世を逝玉ひ幼年ながら一子富丸を以て家督相續の願を上しに速かに聞届けの沙汰ありけるにそ一藩の者い稍く愁眉を開きし中に先君左近將監の令妹花子と云へるを本妻に賜りてより其威權藩中に轟きし老職岩崎肇と云へるが獨快々として之れを悅ぶ乃色なきは抑も如何なる所存ありての事かと討索に肇い妻花子と乃中に一男子を擧け名を幾之助と稱び當年四歲あり正是先君左近將監殿の孫なれバ今富丸をさへ滅いゝ幾之助を以て當家乃養子とし俺も榮利を娛まんものをと先君在世の時は忠臣義士よと稱へられく堅き精神の岩崎あれども子故の

闇ゑ迷ひそめ逃亡の腑をかためしは寔ゑ古語ゑ云へゝる牝鶏の晨を告る花子が勸ゑ出てたるなるべし是よりして犀夫婦は親に富丸を喪き者にせんと曾て金錢を與へて同意させし石戸弓計海野金十郎槇田和三郎岩木半藏等と謀合せ當主富丸を江戸表へ召されざる内を奇貨と

し領分の濱邊に一の別殿を新築き其庭園へ最と廣やかなる池を鑿り彼三河國にありしと聞し八ッ橋八古事を寫して富丸君が遊覽の當日ゑ橋碎け池中へ陷入り玉ふ時毒藥を池中ゑ投玄喪はんものをと甚恐ろしくも巧計みたる此惡謀を遂げるや否亦是よりきて如何なる物語かわる开は又次回ゑ解分べし

其二

再説姦臣岩崎犀い領分濱邊乃地を選みて新ゑ土木の工事を起し爰へ別殿此建築ゑ着手したり然れども其目的とする處い屋園内に架渡きたる八ッ橋破碎乃一事ゑあれば此工事を掌務職人は預て已が謀計ゑ同意させすして之綜調ふま玄と出入の棟梁の中甲乙と撰扱するに植木職六番組の取締なる鹿田屋忠五郎と云へるは自分か幼年の頃の乳母ありしお千代と云へる者の夫ゑして從來邸へ出入も繁く特ゑい妻の主人なりとて其勤め方も他の職夫とい異る

耳か氣象も頗る濶發なれば之をゞ屈竟の味方なりと竊ゑ忠五郎を呼び寄せ如何説つゝしか竟に同意をさせたるゑゞ庭地の工事は渾て鹿田屋一手の負擔となし其他も夫々持場を割つけ頻りに工事を急きみたり爾れは恁る謀計のある作事ゆゑ建築落成までい諸人夫とも外出をとゝめ其自宅へ要向ある輩へ掛役へ申し出て掛役より之れを執計ひ得さするの規則あれば出入其他とも嚴重なる事云ふばかりなきゑ這い就れも工場ゑ來たりし後言渡さるゝ事ゑきて陰に不平ゑ鳴とものもあれと所謂地頭と泣子の此喩また詮術をあらさる故工事の竣を待つ耳なり开此中ゑ彼の六番組なる鹿田屋の人夫ゑ限りては始よりして諸切乃受負仕事と云へる事を承知の上ゑて入場し只管勉勵なきゑ居るゑゞ工事を追々捗取て最早彼八ッ橋中の機械乃場所ゑ及ひしが某日岩崎は海野主計の吩咐鹿田屋の部屋を始め一同へ連日の勞を慰する爲なりとて酒肴を與へ此上共出精して速ゑ竣功致そべしと傳へきゑ故一同當日は早職止とあゝ頃日の勞を憩ひる中ゑ鹿田屋忠五郎い部居にある彌之助と云る植木職は年未だ二十四五ゑして渡世ゑ似合ぬ艶姿且又性質を温厚ゑて律義なれば同社會の者も賛ぬ者とてなかりしゑ本藩中なる河窪幸太夫の娘登代と云事が早晩彌之助ゑ眷戀きを私に胸は焦すと雖も原

來堅き作法なる武家の娘の事あれバ了得よ打つけて云ひ出しかね忍ぶ色音を下女のれ作が敏くも其れと推ましてや彌之助の來度毎に曉をよかまよ謎ゆかくれと更よ感する体ぞあきうち作事係用の人夫とあり小屋よ入たる其後と河窪方へも來たらざるゆゑお登代ハ思ひよ堪へかねて只鬱々として娛しまずお作はお登代ハ心を量り或日お登代よ思ひのたけを認めさせて作事小屋なる彌之助が許よ赴きしが容易よ面會協ねば脚を空しく歸るのみ此事何時か掛役または社會の職人が聞き出たして横かなあらバ彌之助に告げ愚弄せんと思ふ折から今日の酒宴よ酔に乘まて一個が云へば直くに傍から口を添へ寔に彌之助ハ果報者よ艶治郎よと囃さるゝを正直一徹の彌之助なれバ顔を赧らめ迷惑氣よ其れハ全く根もなへ事私い左右河窪様へ其様あ噂さが知れてはならぬ何卒戯言い止して下さあと頻よ制めて居たりけり

其三

折から小家頭忠五郎が入り來たりしゆゑお登代の噂も其を限りよして止みいしたれど彌之助は最と心ならず私に肚乃裏よて思ふやう今仲間の者が右や左云つたを根もあい事と云ひ消ては居るものゝ先頃からお作どのがお嬢さんからの言傳だと云つて度々訪ゐ事も聞たが

素より眞個と思いれず非除眞個の事よもせよ身分違ひあ武家と職人萬一其様な噂が江湖へ立てハ已が方よりも河窪様の御名よ係る事なれバと心を勞めて居る折から疾くも誰の口から出たやら前刻の様よ仲間の風聞此うへとれ作どのよ逢つて篤と實否を問糺し先頃話した事が眞なら彌嬢様へ御意見申し世上の沙汰を取消さねバ此方の身分が卑いゆゑ誘ふた様よ思われては親方へ對しても分跳あまと一徹よ思ひ立つたるより根が正直の心から片時も落居る事は出來ねど外へ出づるを堅く禁ぜま工作中の規則なれバ詮方なくも小家よ飯りて枕よ就けども此事が心に懸りて眠られずまた起あがつて小家を出て徐々門口の邊へ來しよ門番の侍士も宵よ饗應酒のあり一と見え酩酊の狀よて臥まあたり彌之助は門を出づるよ好き首尾ありと思へども飯りの頃よ見咎られてハ反て不都合を來たすべし其れよりハ寧そ酩酊を幸ひ欺まて門を出づるよ如ずと傍へ立寄り搖起せバ門番は眼をこすりあがら彌之助の顔を打眺め是は〳〵好男子の彌之助か今時分に何の用だと云さへ口の巡らぬ様子に彌之介い低聲よて他の事ではありませぬが何を包しませよ私の母は當御普請の職夫に參りませぬ其前から床よ就あたる大病よて一個の妹よ看病を托まて留きいまたもあの四五日跡から毎夜

の様よ悪ゐ夢見は心がゝりと思ふ矢先へ宵のほど便所の邊りよ立つて居たは正えく母の你ゆゑ設や凶事ではあるまいかと何うも心に懸りますゆゑ一寸往つて病氣をば見舞て參り度御座りますが堅い御門の出入をゞ潛と明けてはなりませぬゆゑ熟睡て御座るのを起しますのゝ不遠慮と思ひながらも妨げましか遲くも二時を經ゝ歸りますから一寸御遣りあすつて下さゐませ其代りよゝ明日は緊度御謝儀は致しますると眞個しやかよ頼む辞を正常正直律義なる彌之介なをば門番も偽りありとゝ毫も思はず誰えを親は大切な者然ういふ事あら今夜だけは私は大目よ見て置から努ずともに夜の明けぬうち戻らつしやれと仔細なく許して呉しは天の與と欣び勇で出て行きけり

其四

不題彌之助よ懇慕せまと云れ登代の父河窪孝太夫と云るは世々秩祿百五十石を賜り御勘定吟味役頭取を勤めたり當代の孝太夫ゝ齢已よ知命よ近く先年同藩池田金八郎の娘を妻よ迎へ其間に出生したる女子は乃ちれ登代あり然るに妻は產後の腦み終に治療れ効もなく空しくなつたる其後と男の手よて女子の成育ゝ覺束あしと親族の者等が勸めにより郡奉行笹間贊五郎が妹道乃と云へるを後妻よ娶りしに道乃は繼ぎき顔をもせでお登代を實子の如く寵愛たゝお登代もまた實乃母よ仕るが如く其中垣も隔あく最と睦まじく

暮しゐたり孝太夫は性得潔白清廉の士なれバ巧言令色鮮きを以て本分とし近頃執政岩崎
肇が君寵ヨ誘りて上を蔑し下を虐げ我威ヨ募るの風聲を聞と云へども渠ハ名ヨれふ古老の
職なれバ輙卒なる諫言もなし難しと私ヨ心を癒めつゝ人なき節は時々に妻子の者ヨも語聞
せ國の安危を憂ふる折から這回別殿を新築せんと乃結搆ヨて多くの人夫を傭入れ畫夜を分
ず工事を急ぐは當主富丸君が御遊覧場と稱すれども其實巳が別邸ともなさんの計畫ある故
にや大工沉工ヨ至るまで殘らず自分れ手ヨて支配ゑ毫しも御勘左方へ干預させぬと甚ど不
審に思ひはしたれど索より當主を害せんとまで逆謀ある事ハ夢ヨもしらぬバ何卒して深い
事實を探索んそのをと心を勞する折ヨ幸ひ娘お登代が何時のほどにか植木職彌之助へ懇慕
なしし其文使ひを下女のれ作ヨ托する處を立聞きしゆゑ工事の樣子を聞き出だすヨはこれ
ぞ屈竟の事なりけると一日竊ヨお作を喚び彌之助お登代の事を糺問した秘恁々せよと吩咐
ゑにお作ハれ登代へ彌之助を媒妁せんとゑたりし事の孝太夫乃耳ヨ入りしを駭くものから
また今更に詮方なく只管不埒を賠託入る乃ゑ然れども恁々仕遂げたならバ罪を赦してやる
べしとの辞もあれば承諾なし躊てれ登代より彌之助へ送る文を認めさせ日ヨ暮るゝを待ち

て屋敷を出で普請場へと赴く途中往來途絶ヨ練兵所の邊り近くまで來たりし折から向ふの
方より四五人の仲間が朝れも酩酊ゑたりゑと見え蹌踉ながらの出會頭お作を見るより嘔き
合ひ傍へ立寄り袂を捉へ。夜眼ては緊と分らねいが湛浮膏のあり想な當世面の中年增斯ん
ゐ淋しい往還を一人で何處へ出懸けるのだと一人が云へバ他の者もお作を中ヨ取卷て。強
醉樽嫌ヨ何も彼も浮氣〳〵どゑて堪らないが腰も骨も中々剛さうな如五人や六人引受々て
も枠別障ヨあるめへから己等の木刀を後生だ一本うけて呉んゐと賠託るを肯ず四五人が手
取足取り押へつけ既ヨ手込めヨせんとする最とも危き其折しも小屋を放け出で河筌の邸へ
行かんと來蒐りたる彼彌之助が測らずも遲り會して夫れと見るより卒然に傍ある仲間が背
後ヨ狀たる木刀拔き取りお作が上ヨ乘かゝらんと立躁ぎ居る一個れ男を擲りつくれば不意
ヨ駭き惡棍輩ハ手向ひもせで西と東へ遁げ散つたり

其五

彌之助は仲間を追ッ散して傍に寄り未だ夜が更けたと云ふてハないが平常からまて寂莫路
筋婦人の一人歩行を見込み强淫まうとは惡い奴等何處まて行きあさる乃か知らねいが此先

とても氣を注けて努ず油斷をさつしやるなと云ふ聲听くより下女お作は然う云ふ郎公は彌之助さんかと問いれて此方もハッと駭きオヽ其聲いお作どの無提燈よて大膳な和女は何處へ行く氣だと云へばお作は低聲よなり何處へと云つて今時分勝んな淋しい所を行くれも度々郎公よ話をしたれ孃さまの一件よて先おろかから七八度普請小家まで往つてい見たれど親兄弟でも對面は許されぬとの嚴ましい中ゆゑ據ところなく飯りいしたれどれ孃樣は其れが爲めお食もすゝまず床よ就きぶら〳〵病よ日那樣やまた奥樣も深い樣子を御存じないゆゑ御心配妾も氣が氣でならないゆゑ如何なりと去て郎公に逢ひ一寸なりともお孃樣の傍まで來てさへ貰うたうへ氣慰め文句を聞かせたゆゑ其首い未遂女の事なれば安神をして病氣も癒り旦那樣や奥樣の御心配もあるまひと思つたので郎公を連れて參りまするとお孃樣へお話申てお庭口から密と御行で出かけて來たが測らず今の災難よ妾は如何なる事やらと氣も魂も消入る心地怡好郎公が通り懸つて救けて下さつたも主人を思ふ妾が忠義を神佛が守護て下さる事であらうが爰で逢ふたい丁度幸ひ直ぐよ是かられ邸へ一緒に往つて下さいと縋へば彌之助打點頭「其れい私ども望處トサ云ふ聲と先ころから卑ーい私へお孃さまから艶しい文を下さるゝのい嬉しいやうだが了簡違ひ素より武家よは堅い作法のあるとい常から聞いてもゐる去殊には一粒種のお孃樣が身しい出入の婦人と其樣な浮名が立つた時よは第一親公の御名の疵また私が身も旦那樣の御立腹をうけ芝居でやる御手討あとを喫つた時よは一人の母や妹の歎きと氣が注いて見りや怖くて堪らず今日も小屋よて仲間の者が雖云とあくお孃さまの噂で私を愚弄のい謗ざよある人の口よ戸の建てられぬ無實の浮名就中今度は大切なる職業を擔負稼ぎ中よ斯んな事が設御家老樣の耳よ入つては私ばかりか河窪樣の御身の大事其れゆゑ今夜門番へ親の病氣と僞つて稍く小家を拔け出したはお邸へ行きお孃さまへ篤と御意見申さうと決心をして出かけて來たが和女も何卒此周旋は向後斷念止て下さいお孃さまが大切あら其親公の旦那樣やまた奥樣は特更大切和女の忠義と思ふのは筋違ひな忠義だから今夜は私と俱々よお孃さまへ懇篤お御意見申すが眞個の忠義ヲの樣に惡棍の手込めよ遭いうと去られたい道あらぬ周旋をる是れも主人の罰だらうから能く分別をするがいゝと思ひがけなき彌之助の辭にお作も理の當然成ほど郎公のいふ通り悪い事とは知りあからッィ浮架〳〵と今日までは此お使を爲て居たれど向後い俱々よ御意見申すが却って

忠義「其れでは得心まして下さるか斯いふうちも心が急くから直ぐよお前が案内よて「些度も早うと下女お作は前よ立つゝ元來し路へ脚を疾めて急ぎ行

其六

れ作とゝもに彌之助い艶て河窪れ邸に來たり庭口の切扉より内に入れば座敷を離れし一室の障子に灯影乃撮るは娘お登代が人さつ居室よとれ作が辞よ彌之助は了得よ足慄いれ進みかぬるをお作は手を採り甲夜は旦那は御番の御不在奥様はまた御不快よて毎の御居室よお臥ゆるお孃様の御居室とは離てあるから大丈夫特には怪い譯でもなく俱々御意見をとる事あをべ非除後日よ知たりとをお歡びこそなされ御立腹なさる筈いない切角拔まて來ゐながら爾とてはまた度胸のないと厲されて彌之助も成ほど然うと微行よ障子の傍まて打連行くよお作はやをら障子よ手をかけお孃様〳〵彼人がお臨ですから一寸とお逢を遊べしませと披々障子れ其内よはお登代よあらて父孝太夫が最嚴まく座ゐたり綜の意外よお作よりも彌之助い仰天まて遁るにも遁られず顔色變り茫然と差俯パ孝太夫は刀片手よ膝立て直し「恁る事もあらんかと御番と唱へ家を出で其方ともよ油斷をさせ置き前刻歸宅なしたるうへ娘

を紀ま子細い听きぬ只憎きは彌之助なり汝先代の彌七以來吾邸へ出入ま祝子ともよ白般仁慈を垂け置し其恩義をべ打忘れ主人よ齊一吾娘と密通ゐすとい育語道斷今夜忍んて參りまゐそ天罰なをと諦めて速かに首を授すべしまた周旋の下女お作も俱よ免れぬ刀の倩式家の作法を犯ま丶よい元來覺悟のうへなるべし仍屆者メと以ての外なる主個の憤怒ば彌之助は膝をすゝせ聲ふるいせ「其れや旦那様侍無理て御座りますお孃様と不義を致す位なら今夜嚴しい門を脱けて態々御意見よは參りませぬ其仔細は私まより此お作と此が能く御存じ植木職人の卑しい身でも我等親子が旦那様に蒙し御恩い忘れませぬパお心得違ゐお孃様へ篤と御意見申さうと思ひ過ごして夜中よ來たゆゑ御疑惑を招いたも無理ならねど不義密通をした抔とは此身に覺え乃ない濡衣お孃さまもまた只の一度出會た中でもない私と不義をした抔と仰まやるのは彼來度々下さつたお文の返翰を爲ゐいのを怨みよ思つての虚ぢかコレお作どの私が徒是いふまでもなき詳細事を知つてゐる和女ハ口から旦那様へ此仆疏として下さいと遣へパお作も手を突いて只今彌之助が申ま丶する通り實い先頃よりお孃様が彌之助へれ文を賜りし事はあとと手よだよ觸ず差戻し今晩もまた妾がお文遣ひ此途中よてと

是れより前よ記したる綜の体爲を述べ了り恁ゝ次弟ゆゑ彌之助に於てい毫ほども不義の行爲は御座りませねば何卒今夜の儀は只管よ御容赦なされて下さりませとおそる〳〵に述たりけり

其七

登時河羅孝太夫はお作の勤解る仔細を聞くより打點頭て容体を正し「幼年の頃より吾邸に出入りし父彌七よ似て篤實なる性根のきとは存ぜもかど尊思のゆと云ふ諺に特よは若き身の上ゆゑと乃吾想像より不義者と思ひ詰ては過りなり實は娘も其如く道よ背きて艶書い送るとど一度ゝ返翰をしか事なき堅固の性に彌生して父母よ心を劣さゞる病氣とまではなりたるゆりと賠詫る辭は虛言ならねど尚も實否を探り見ん爲め汝の來たるを待ちゐしなり今お作より逐一よ聽いて疑念い全く散れ堅固の性根を見抜く上い今更めて孝太夫が養子とあし遅ては娘と配偶べ一假よ父子の盞せんれ作准備と吩咐け遣り其場を斥け此へ〳〵と以前よ變りし孝太夫の辭よ彌之助いよ〳〵懼れ冥加よ餘る仰せなれども御承知の通り私ゝよは母と妹が御座りますれば一應相談を致した後に其御返事をと道ふをも竣たず否々其儀あらば

心配致すゆ母い勿論妹にも承諾する樣小可より說諭キべゝ安神せよと云ふ折からよお作が運ぶ銚子ト器熨斗昆布兩人が中よ列べつゝ其身い次へ立つて行く跡に彌之助もぢ〳〵と如何して宜いか吾身で吾身の心一ッを定めかね只茫然たる景狀を孝太夫は打瞰遣りて「卒彌之助杯盞せんと十器把つて自分よ飲み干し三寶よ載せ差出だされ今い辞もなり難ければ後日よ如何とか拒絶の術もあらんと憂慄ながらも稍く之れを手よ受けて假の儀式を濟まゝは宛から夢乃心地せり鱠て幸太夫は銚子ト器を取片づけて聲を低め斯く父子の盞を濟ましたうへは渾ての事よ遠慮は入らず何事にまを包み藏さず万ひよ語合ふゆそよけれ其れよ就き旦差當り尋問ひ度は淨瑠殿れ工事あり聞く處よよれば人夫の者い假令如何なる事故ありても塀外へ出づるを禁したるよゝ其方の職頭と聞きし彼鹿田屋忠五郎い老職岩崎生が出入の者とか定めて事實は存じてをるべし他言は致さぬ由孝太夫よ包まず語聞かせよかしと問ハれてギックリ彌之助い再い父子の盞を強て侑めし所存の底は工事の次第を聞き出ださんとの深き巧計でありたる事か爾ればとて親兄弟へも他言せまじと誓ゝ工事を恁々なりと告らをもせず告ずば飯れぬ此場の仕誼進退維よ谷りゝかと正

直一徹は彌之助は須臾途方に暮るしが心よ決せし事やありけむ稍くよして顏を仰げ「親妻子よも罷き玄と神文書た工事の模樣道へば忽ち血を吐いて奈落地獄へ墮るか知らぬど蓋をした鼻樣へ婿かゆ覽よ入れる品あり之を閲玉へと差せすは新築中ある別殿の浴室へ微細よ符牒を以て彼八ッ橋の破碎器械を示ゝ品よてありければ孝太夫に餘りれ事よ只叫息繼ぐばありなり

其八

岩崎肇が逆謀を始めて識つたる幸太夫へ駭く色目を故と藏て此企圖のある事は先頃竊よ聞出せーものから容易ならざる一大事と今日まで猶豫致ゝたるが其方の誠忠よより此逆謀は確証を得たるは諄々も滿足なり其方もまた一旦は忠五郎等の爲めよ脅迫され此ゆ普請よ係りしとへ云へ今繪圖面を差出したる其功よめて遣回八郎は吾等が佶度執成得させん尙此後よも心注きし事あらば密々申し聞かせよかしと道ふ折からに床の室の時辰と丑刻を報ゝたゝよど彌之助は小家への飯り心に悪れば暇を告げ躰て河窪の邸と出てゝへ之れを互よ一生の別とゝそは知れたれ抑も甲夜の事は渾て幸太夫が計策にて普請小家の内情を聞き出ださん爲めなりしが其權謀曠しからて奸臣岩崎が逆意の底を搜り出だしたれど元來他聞を憚る儀なれば彌之助に尋問の間は家族の者を別室よ斥け置ゝゆゑ工事の密謀を彌之助より聞識りしは主個幸太夫一人あれば彌之助を返した跡よて一個熟々思惟

みるに斯る逆意を企つるうへからい豈夫肇一人の計畫あらず多少の同類ありての事と覺ゆれば親族縁者たりとも此一條い洩らされず如かず江戸邸ゑ赴きて富力君の御後見たる鳩翁公(分地某の領主)へ密告し同邸詰なる老職松倉丹　殿とも協議を悪人輩の根を斷つあそよけれ今彌之助が御語よてい工事の落成は遂くそ未だ三が月を經ぬべしとあれば只速かゑ江戸表へ出進なすあそ」策ならめと忠義に凝つたる幸太夫は深き思慮なき妻子の者とまた妻の兄なる笹間賀五郎へ至急ゑ思ま事ありて京坂筋へ赴くとばかりの通書を認め旅裝もそゝ〳〵ゑ妻子の來らぬ其うちと切扉口より立退きしを家族に更に知らざりけゝ恁て河窪は路を急ぎて城下畢頭なる鯉の松に傍ゑ來たりまし頃い箱寅刻ゑも近かりしが今四五丁も辿みあゞ縋を屋ふゑ便なるべしとあやあき夜をゞ冒して行く鯉の松の碑の偶より各々頭巾ゑ面を包みし三個の監尬兒鼠はを出で帶せし刀を拔くより速く刺をも云いて幸太夫へ切つてかゝりし狼藉ゑい不憲をうたれて駭くものから碑を小楯ゑ執り左右に翻配同ぎく刀をあきあはせつゝ寄らゞ切らんと体を構ぬ(因曰此鯉の松と云るは往時天正年間雷城の外塚へ埋長丈ゑ近き大鯉の屍体泛しを里人獲得て此地ゑ埋めしが其側らゑ樹し松ゑ僅一年ゑして

巨大の幹となりまゆる某好事家が此事を聞き當時一基の碑を建て鯉の松と號しなりとか」

其九

登時河窪幸太夫い憤れる聲をふり立て「何者あれば理不尽ゑ行途を妨げ狼藉あす予必定盜賊追剝なるべし命知らずの奴們かあと云いせも果ず監尬兒とから〳〵と打笑ひ「ヤア盜賊呼ばり不禮あり吾々は汝と同藩而も御吟味方に在る村瀬傳藏「前田左右七「また一人は湖普請方高木判藏を知ざるかと道ふゑ河窪いよ〳〵驚き「原來い奸盜岩崎の徒黨の者ゑてあり志よな此に待受け居しがらゑは吾を切害あさんず所存か「云ふゑや迫ぶ吾々が謀計を知つたる汝なをゞ大望成就の血祭に旦其の首を申し受くると云ふうちゑ早伴藏い問答無益と切つて蒐れば心得たりと幸太夫は丁と受とめ火花を散し零時八ぼとい三個を相手に屈せず撓まず戰ひ居たり元來幸太夫は一刀流の奥義を極め一藩中に聞こゆる達人斯る鼠輩の三個四個はものゝ數とも思はねゞ太刀す玄亂れず前ゑ顯れ後ゑ隱るゝ出沒自在三人ともゑ薄傷を負ひ今い危ふくなつたる折しを何處よりかい森と書して飛び來る彈丸幸太夫が胸板射貫き剩れる丸い鯉の松の幹ゑぞ趾まりぬる憾べし河窪い宛も忠憤義膽の士なれど奸賊輩が毒

刃代下に斃さるまた惜しき事ありかし折から樹木の蔭よりして右手よ鉄砲左手よい令燈携へ徐々と立出る岩崎肇を見るより三個は撃齊一「思ひがけあや御家老よは再ゑ後より此所へ「如何にも甲夜各位を招き遂一申上たる如く仲間共が途中よ於て酒興よ乗じ婦人を捉へ戯れし折拾ひし文は正しく河筌の娘より忠五郎の部屋よ在る植木職人彌之助へ送る艶書なり察する處密通あし往來すると推せゑゆゑ他の職人等と異りて彼一大事の建築を明して委ゑ忠五郎乃下方なれば捨置れず早速小屋を探索さゑへに果して彌之助の行方知ず小家門番の申し立てを聞ゑに母の病氣と偽りて脱け出だしたるもれあらんと具よ動靜を索りゑものから綜あら立ては世俗よ云ふ毛を吹き疵をもとむる愛ひと竊よ各々ト課ゑ合せ河筌方を窺はしへに案の如く彌之助ありて幸太夫と密談れうへ屋敷を出てし其跡より旅裝を調へ幸太夫が出立ゑたるは彼の彌之助が普請の密事を告たるゆゑ江戸御在番の鳩翁公へ注進なさん爲なるべーと思へば猶像はなり難く各位へい幸太夫暗殺ナ儀を御依頼申し吾はまた彌之助を直よ召捕り忠五郎へ詮議の事を委ね置けど但心安からぬは暗殺の一條にーて河筌ゑそ書番にて人よ知られし劍客なれば設ず損なば臍を噛むとも追ばぬ大事と存ずるゆゑ後より參り樹蔭よありて朧ながらも月の光りよ覗ひを見定め射つて發ちし只一發よて了得の武士も晩くも往生是れよて心よ懸る雲なし各位勞をかけ申したと道ひつへ手よ持つ舍燈よて幸太夫が死骸を見瞰り撮と心地よげに微笑ゑみたり

其十

有恁べしどい努知ら如河筌方よては妻と娘が彌之助を密問なすうちい決して座敷へ來る事無用と堅く禁められし事なれば孝太夫が裏口ーり扱け出て之事を更よ知らず左右するうち東天紅と曉告る雞の音よ家内の者は不審み叱らるへかは知らぬども密と御動靜を窺ひ見よと母の辭よ娘お登代は徐々奥室へ來て覗くよ内よは二人の影だに見えぬ道い必得ずと隔の襖を押披て四邊を見るよ父が机代上にある該遺書を見認めしゆゑ打驚く事大方ならず聲高よ母を喚び樣子を告げ母子倶々驚下しく早速兄貴五郎を迎へ何にもせよ深き仔細のある事なるべゑ明けなば病氣の趣きに屆けを出すべゑと笹間は頻て歸宅したる折もあそれ以前同家乃若黨なりし星野幸藏と云へる者忌を切つて駈け來り鯉の松乃邊よ於て何者の爲所にか孝太夫を切害し有ゑを城内より捕亡方か人夫を連來り死骸を舁ぎ飯り去旨を告げた

るよ子母子は夢ゝ夢見し心地餘りの事ゝ涙も出でず茫然とまて居たりしが幸藏は涙を拭ひ吾儕い一應御城内へ參り越志篤と實否を聞き合しゝうへ復度御注進をアわぐべしと引返さ行折柄頃ゝ外面ゝ人足繁く上使とまて用人國富角太郎樂内もなく打通をゞ思ひがけなき上の使ゝ泣きいらしたる眼を拭ひながら孝太夫の未亡人道乃い菲々しく是を迎へて上座ゝ就かせ作法素さず禮をあせゞ國富い已が名を角臂張て嚴しく「慾傷の種子い幸太夫の定て知りたるあらんが河窪幸太夫事御文庫金五百兩を盜み逐電の途中鯉の松の邊ゝ殺て何者の爲ゝか切害されしい爾ゝ出て〻爾ゝ飯る之れ天罪と謂ざくれみ就ては家族の者ゝも取調入筋あれゞ追て御沙汰あるまて門戸を閉ぢ謹慎罷りゐるべしとの上意なりと聚耳ゝ水乃姿賊沙汰乾かぬ袖ゝまた重なる涙の種の濡れ衣ゝ道乃は須臾返答だゝなくより外れ事なきは道理切て哀れあり

其十一

話頭轉頭植木屋彌之助は義理ゝ蔓まれ只得も普請の密事を河窪へ明して給國こて渡しゝい死を決たる心の覺悟爾れ共一旦母と妹に暇乞をと小屋へい帰らず已が住家へ赴かんとせる途中に於て岩崎の配下の武士に捕られ縄ゝかけられ小屋棟梁なる鹿田屋忠五郎へ引渡まとあり志が有恁べしとい思ひがけはゞ有繁に必安からで如何なる事ゝなるやらんと胸騒けど詮術あけれゞ引るゝ僅ゝ工事小屋ある材木置場の内へ繋がれ居たり縮て全く夜も明けく就業を報ずる柝の音ゝ職夫們は持場持場へ出向て番組の小屋の内にも人影あけれゞ忠五郎は九郎藏と云ふ乾兒を連れ此所へ入り來る姿を見るより彌之助は差俯向辭もなくて居たりしが忠五郎い九郎藏に戸締させて傍に寄り「ヤイ彌之助汝い今度の御普請中ゝ抜出を禁りられた事ゝまた御普請ゝ模様をゞ他言はせぬと誓文へ血判したのを忘れたか故は親父が死んで以來職業が閑ゝて母親や妹の手前も氣兼がちだと歎いて居たのを聞いたゆえ過分ゝ工手間て傭ひあげ正直ものだと思いゞこそ御家老から御願みありし大事の場所を委してある人夫の内へ加て置き首尾能御普請成就のうへゝて母子樂々世を送れるやう御家老からは御褒美を下さると云ふ御内意は詳細話て置たるに重る御恩を打忘れ規則を破つて門を放出て那の河窪のお嬢樣と不義をいたらき剰さい大事れ普請を幸太夫へ明告たてあろうがお人眼るさいと思ふ[illegible]御家老にい疾御存玄吟味をしろと吾が方へ直ぐ引渡まゝなつたのだゞア彌之

助昨夜小屋をバ脱け出した後河窪の邸へ云つて何を饒舌た明白よ云つてまへ強情張ど後計りか親や妹の爲めにもなるまい何うせ犯した罪ある身体苦痛せぬうち速く云へ　九「コレ彌之助今　乾盆が云つた通り鄙家老の方よやア探索が行屆いてゐる此詮義知らぬと云つても濟無上から其れよりやア眞直よ斯いふ譯で斯ですと云つてまめへバ乾分から御家老様へ御賠詫を主くお前の罪も輕くあり母親や妹も安心素直よ仔細を話すがいゝぜと猫撫聲よて問ひかけたり

其十二

死ぬる覚期も今更よ胸轟きも、彌之助は大事を明じた其人は奸徒の爲よ鯉の松の露と消ぬる事を知らぬバ設卒爾よ陳述てば假よも親子乃　盞を酌替したる幸太夫が忽ち憂目に遭ふ事あらん所詮死そると決し、身をれバ責殺さるゝを何條厭ふべきと稍々顔をふりわげて御恩になつた乾盆へ濟まない事とは知りながら頻よ母が悲しくなり規則を破つて出かけし途中河窪様の召婢れさをどのが悪漢等よ手込よさるゝ難義の場見かねて飛込み悪漢等を追散したうへ様子を所けバれ嬢さまから云々だと思ひがけない話ゆえ堅く拒絶御意見を申して呉

ろと云ひながら同家の御門まで送つて行きましたれど御邸の内へとく這入ぬ私が何んて御普請の事などを申しませう御法を破つた罪は覿御邸縛られて此通り乾盆よまで知れましたからハ何卒御存分よあされく下さりませ決して御怨ととい存じませぬと道へバ九郎嶽眼よ角立て「コレサ彌之助其様な白化くれた事を云いず斯々した譯がわつてッと恁々よ申ましたと云つてしまめへば濟む事だ我やア乾盆はしめ此九郎嶽を馬鹿に爲て嘯者氣か「何何して我が乾盆や兄貴を馬鹿よ爲ませうぞ「馬鹿よ爲なけりや痛苦せず實は斯だと吐かまて爲まへ夫ぢやと云つて其事を「云ずバ斯して吐かせて見せるゝ傍よあり合ふ天秤棒よて骨も碎けと打すゆれバ苦と叫びて苦む体を忠五郎は暫ぼ嘲遊り「ヤイ彌之助真痛苦をさせぬ様と優しく云へバ宜事よして佛性なる吾等を涙にかけて欺かふとは曲に似合ぬ太い野郎だ吐かさにや飽まで吐かす様よ器械よかけて云はせて見せると斯ぬりわげて彌之助が額の汗を丁と打バ忽ち四五寸斜よ切れ血は迸しつて宛恐に顔も衣類も時あらぬ韓血を染せり恁る責苦も覺悟の彌之助打れ擲れ尋らるれど知らぬ知らぬと道ふ聲も辛くに堪て吐くのみなれバ元來短慮の忠五郎九郎嶽よ眼配して到底生ては置ぬ奴恨ぐよ吐かさぬ腹癒よ

那處の梁へ吊おろし弄殺しにしてくれんと慘忍猛悪極りなき辭の尾よ付く腹の丸郎藏オヽ合點と立寄て苦痛よ息も絶々なる彌之助の衣類を剝取り裸體とし慈悲用捨もあら絶絶て俾々縛り小屋れ梁へグッと吊上ゲ吊下せバ忠五郎は佩たる一刀すらりと引抜き右手に携へ徐々傍へ歩みより是れでも云ハぬかサア扱かせと所厭ハず滅多切り苦しき中よも彌之助ハ兩の眼を赫と開き勿体あくも殿様を殺さんとする大悪人此巳等ゆえに慈悲を知らぬは素より覺悟を爲て居れど餘りと云バ非道な責め苦人よ怨のある者かない者かおぼいてゐろと宛も恐ろしく云ふが此世の餘波よて終には弄り殺されしは無慘と

いふと愚あり。

其十三

濱邊の城下を四五丁離れて神谷村と云へる所あり宮村壁唄よ軒傾き壁破れたる荒屋は彼の植木師彌之助が住居ゐるが母のれらくは去年の暮より重きといふよねあられねどと痛痢に臥

て起もあがらず睦月の末たり彌之助は御用普請の爲め御別殿の建築小家に寢食を昔家へとては飯ぬべ妹お辰が病人の看護よ如才なきものから元來石て手請し如き貧古暮ゑ乃其うへよ醫師への謝禮藥の價何くれとおき入費勝にて彌之助が工料の内なりとて鹿田屋より廻し來たる賃錢耳よては兩個れ口を糊するよも足らねばお辰へ病人を介抱の片手間よ洗濯物や縫針に聊かの賃を得活計の足志となし居たり今日も終日母親の看護を勤め夜仕事も了て母が寐所の蒲團の端よ脚を伸し暫生勞を憩んとすれど頻よ胸騷ぎして眠れず母の病兄乃事あど思次けし枕下なる行燈の灯は窓洩る風の吹入る度消なんとしてまた明を射す破れ屏風の陰よ誰やら居る氣息よ駭きながら枕を擡げ熟々見れば思ひきや兄彌之助が何時乃程よか立飯り來て座す体あれバヤヤ兄さんかと道はんとすれど宛然口を閉ぢられし如く物いふ事もならざれば起よらんとするに身動きあらず切ては母よ知さんと焦れど五體いすくみて自由を得ず此時兄は潸然たる涙の顔を稍うあげ父が死あれた其後ハ私よ腕がおいためよ母親ハじめ妹よさで苦勞を掛々た不孝者今度の御普請が成就したあら兩個に安心させませうと思ふに事も奈麻與美の甲斐あき別れとありましたが何後い吾よ代つて和女は母へ孝養頼む斯

る愛目も殿樣の御身よ係る大事と知りつゝ母公を安心させやうと思ひしより心樂違ひの天罰が忽ち酬ゆる地獄の責其苦も厭ひはなけれども母公の事心よ懸れば和女に諄々賴むそやと云ひつゝ再も泣沈む兄の動靜を見聞よつけれ辰は彌よ心ならねば思きつて聲をわげ其をと何ゆえ如何云ふ譯てと身を焦りつゝ起上り兄乃傍へ行かんとすれば是れ元南柯の一夢よ〻く其身い依然母の傍に臥して身體びつしよりと汗に鳴海の單衣二重よまはせし細帶も解るべかりよ胸轟きぬ

其十四

眼は覺めながら夢とし思えぬまてよあり〳〵と兄の姿ゑ看えのみか聞よし事さへ忘れもやらねばお辰は心安からず夜明けなバ鹿田屋許赴きて樣子を聞かんと稍くに復帰枕よ就きは爲たれど寐られぬ耳へ早晩よ聞こゆる鷄の聲よ驚き起上りて朝餉の准備母が眼覺めよなつたあら夢の顚末を詳細告げ城下へ行んと竈の下へ火を焚つけて居る處へ彌之助と同じ植木職の卯太郎と云るが息急來りお辰との宿よ居らるかサア大變だ〳〵と聲かけながら内よ入バ爾おきたよ左思右思案玄續けを折あらゆえハッと思ひて立ち出るお辰の姿を看るより

め卯太郎は眼を渾ひながら「コレ／＼辰坊必ず喫驚はせまいだが兄彌之助は昨夜普請小屋よ
於て切られて死んだサ、、、、其仰天は道理だが旦心を鎮めて聞くがよい曾て御前も知る
通り此度御別殿の御普請よ私も職業に行等てあつたが生憎持病の癇癪が起り所詮働きと出
來ない事ゆゑ拒把云つて宅よゝ居たれど此節はみ癒したので人夫の御用を頼み度と昨夜鹿
田屋乾盃の宅へ往つたよ忠五郎様ゝ不在ゆゑ那の九郎藏へ委細を頼み土產の印と菓子代
よ袂よ入れたる露金の目方ゝ僅少な愛想であつたが重い効能よ巡つたものか平常は腹の丸
郎藏から竊よ聞いた彌ク助の事盧か實か知らあいが何時の程にか河窪のお嬢様と通じ合御
普請中は親子でさへ對面出來ず門外へゝ堅く出られぬ規則を破り其れ嬢様に逢ひよ往つた
事か御家老様の御耳よ入つたとやらにて他ハ職人への懲戒よ重き罪科よ處る様よと嚴しい
沙汰よ詮方なく今朝乾分と吾が手よて惘然だが殺したうへ死骸は小屋よ三日間曝して他
の職人へ嚴い規則を見せてあるが聞けゞ彌之介の母親ゝ長い病氣で居るとの事斯んな非業
に死んだと聞いたら病癇の障よなるであらう然し到底ゝ知れる事ゆゑ徐がわつたらお前か
ら報知てやつて諦めさせよまた其跡へは乾分へ談ぜお前を加へる事にしやうと信切らしう

話したゆゑ肝潰れるまで驚いて顏を見るさへ恐ろしく暇乞さへ疎卒に宅へ歸つて直ぐに此
事知らせよ來様と思つたれ共何んだか夜道は薄氣味惡く其れゆゑ鶏のカアを聞と其まゝ
駈出し飛んで來たア、好人であつたのよ心からとは云ひながら非業な最期を爲た事たと涙
よ鼻をつまらせて飽迫わげたる卯太郎が話よおたつゝ心消ゑ絶入る計り泣倒るゝ屏風の陰
よも先刻より様子を聞きしか母おらくと病苦を忘れワッと聲あげ正体更よあかりたは通理
切てゞ哀れなり

其十五

話頭復閑單表河窪幸太夫の妻道乃ゝ良人が非業の最期を聞き胸旦潰るゝ折もこそあれ上
使として國富角太郎が入來り良人幸太夫が御文庫金五百兩を奪ひ遂電したるに付家族の者
にも追て沙汰あるまでゝ謹慎を仰附らるゝ云々との厳命なるゆゑ母も娘も今更よ只伏沈
み居たりしが上意を傳へて角太郎が歸城なしたる其跡へ實否ゑ聞んと城中へ赴き去星野幸
藏が立歸りて道る様百般探索致しゝなれど何分事實ゑ譯兼ねれども素より潔白ある旦那様
が平生の汚穢質御文庫金を盜抔とは全く讒者の所爲あるべし然すれゞ旦那を暗殺なたるも

全く其奸徒の同類よて近時風聞ある如き御家を横領せんとそる者の謀ならん此上い逆反の禁を探索ふて旦那様が盗賊の汚名を雪ぎ玉ふが專一成べしと歎きに暮て正体なき道乃が登代を勸り慰め再てあるべきにあらざれば死骸引取りの儀を政廳へ願出てしよ格別の御憐愍を以て死骸と妻子へ引渡さるゝと雖も公然葬送を營む儀は相成ずとの沙汰なりしゆふ詰んで傍受を申し贊五郎は死骸よ引添ひ歸邸せしよそ一目看るより妻と子い幾り果たる死骸よ縋り他眼も恥ず歎き居たり贊五郎は兩人を説諭し其夜假よ香華院へ送り埋葬し翌日より い上八御沙汰を如何有んと待つ折から其八日目に至り案内を乞ふて入り來たるい家老岩崎肇あれば妻子は駭き一室に請じ饗應大方ならざりしに岩崎は席を更め偖浮内室遺回は幸太夫殿不慮の次第愁傷お察し申すなり平生談白篤贊の聞ゑある河窪生が意外の挙動ありたるい如何よも不審千萬なれば察する處幸太夫殿よ遺趣ある者の所爲ならんと小可疾くも推せしものから何分議論紛々よて其家名を斷絶させ家族へ追放を仰付けらるゝが至當ならんと申し出づる者の多き爲め小可が議論更よ立たずゝ日ほ沙汰あるべし重々の不幸よく寔よ當惑もあるならんが何事も時節と諦め旦く歎きを禁められよと已が悪事を色にも出さず陽よ

飾る仁慈の辭大姦忠よ似たるの古語は斯る比をいふなるべ き

其十六

己が逆意を洩れ聞いたる河窪あれば活てい置か岩と同志とゝもよ斬殺なしゝ幸太夫の許よ來て何故肇が斯く懇切よ勸るかと索るよ未だ岩崎が先君左近將監の妹花子と婚儀整はざる前笹間贊五郎の妹なる道乃よ深々眷戀し何卒して宿の妻よ迎へ取らんと既よ某人へ媒妁の事生でも依囑置ふ折から亡君の命よより花子を降して其身の妻と定められ太く一藩が面目を施しい爲たをど左右よ道乃が事い忘れやらでありしうち縁わつて河窪幸太夫の後妻に嫁しとの事を聞き宛然掌中れ珠を奪はれ志心地したれど亦今更よ只得と念諦らめ其後は花子との中睦ましく謀反の原なる幾之助と云ふ男子をさへ設けしほどなるが幸太夫を切害しとより未亡人道乃を慕ふの念復度起り盛ハ少し過ぎたれど色香の失せぬ晩樓手折つて眺よせんものをと初も日の經つを竢ち吊慰を假托信切らしくも入り來りしなるが爾る所存ありての事とい道乃は素より知るべき様をく況てや現在亡夫の敵なりとは努思はぬ今岩崎が仁慈ある辭を聞き亡父が汚名を雪ぎ復讐の志願を遂せんにい此人よ寄るの外いあるべからず

と女心よ深くも依願し亡夫が寃罪を訴へて何卒老職のほ仁恤を將く幸太夫が身よ降かゝる
悪名を攘き河窪の家名相續あるやうにほ執成を願ひ奉ると涙とゝもよ搔口說バ華ゝ點眼進
乃ゑ慰め歎ず明日出仕の上寛典のほ沙汰あるやう盡力すべしと當日は佛室よ回向あと志飽
まで仁
義の假
聲よて
歸邸せ
志が其
れより
と日々
同家へ
赴き昨
日の評

芳宗畫

義は箇
樣〳〵
なり今
日のほ
沙汰は
恁々な
りしな

ど已が心の欲するゝよ隙べ渾て吾一言によりて河窪の興廢に干る如く說示すにゑ了將婦
人の思慮淺く只管岩崎を信玄ゝも當今國政を左右するかとまで威權尚き名1負ふ執政の岩
崎と思へバあるべ志肇と充分道乃よ望みゑ屬さきめて最早手に入るゝよ難き事はわらじと
一日の黃昏酒氣を帶しを奇貨に同家に趣き坐敷へ通れバお登代ハ下女のお辰を遣れ謹慎中
なれば竊よ香華院へ參詣して家に在らず道乃一個が家の事を案じ顏ある折からゆゑ機こそ
よけれと岩崎は遠くかけたる懸の謎も解かねバ家の大事よも係る如く袖を捉へて口說き立

てたる肇の悪動よ道乃は太く驚くものから今愁ひにふり放てい誰よ縋りて亡夫の汚名を雪ん者もなき事ゆゑ操を破つて操を立つる常盤の前の故事を倣ふにあらねど吾身一ッを棄あバ家名も恙があう相續の沙汰あるに至らバ繼子お登代の身も安穩ならぬ前妻への義理も欠けずと不義と知りつゝ家と子を思ふ意乃迷ひより竟よ肇が曳く袖といらひもやらで轉寐よ怪しき夢を結びしい最と淺間しき事なりき恁る折から香華院より立歸りたる娘れ登代が坐敷の次まで來て聞けい母と肇が私密体ゆゑ折惡かりきと足を禁めて測す動靜を立聞くよりハッと計りに胸轟きし後の話說い次回よ記さん

其十七

春の夜の朧ゐがらよ照る月の影を栞よ蹌踉と二の九弥の濠よ沿ひ來覧る兩個の醉客い跳れも兩刀帶したる年壯からぬ武士あるが頼みある中の酒宴かあと綱の謠ゐ呂律は廻らず千鳥脚よて歩み來る折しも向の方よりして路を急いて駈來る娘が思はず磯と突當り心れ焦まゝ迂架〳〵と思いぬ侮無禮ゑ致しました眞平侮免下さりませと賠詫ど肯ず瞋よ角立て如何よ夜路と申しあがら大の男が兩個連よて歩行を心注かぬとは以て乃外なる慮外者と道へバ一個ゐ辭の尾よ屬き必竟吾儕兩人を輕蔑致せし擧動なり其分よてい了簡ならぬ何處の者か夫を吐かせと云ひつゝ顔を瞥〳〵瞰遣り誰かと思へバ嚇こそ河運の息女お登代どのでは御座らぬかと道ふに一個も打眺め成る程是れい河運の衣涌娘丸の夜頃よ供をも連れず特よは遠だしい其の体よて何處へ侮臨なさるゝそと問はれてれ登代はハッと思へど故と辭も慇懃よ誰殿かと存じゆすれバ大貫様よ角田様侮遊歩踏りて侮逗りまするか今晩母が暴乃病氣生憎下女も居ませねバ只今侮殿醫三仕様をお迎ひ去よ參る感失禮の段は幾重よも侮容恕なされて下さりませ心も焦けば侮免をと云捨行かんとする袖を右左より緊と捉へ侮母公の病氣ならバ醫者を招いて診察より老輔岩崎肇殿の針を頼ひが早擬治また嚇には弄憐が所持する針を一二本進らせるから俱よ來玉へと酒氣よ乘玄て戯れかゝれどれ登代い驚き振拂ひ侮申戯も時よこそよれ母の病氣よ心配中且様、な淫猥を聞耳なし無禮ゑ事をバ仰ゑやるあと腹立しさよ聲さへ荒く行過んとするを復引禁め然う堅造よ云たこて現仆母は良人の忌日の七々日さへ經ぬうち情夫を引入れ淫樂するを見て見ぬ振の嚇が心は植木師淵之助が殺されし後彼よ代つた好情夫と俱よ密會するゆゑてあらう爾すれバ到底淫行娘の汚名は免れぬ嚇ゆゑ

一個あるも二個あるも密男よ替りはなき面い至つて醜男なれども婦人よ懸けては信切者一針うつと可愛と云はせて見せると兩個がしおだれかゝるを右よ除け左りよ避けて通んとすれ共軟弱女の悲おさい大八男よ押へられ蹂躙蕾の初花も此狂風よ散らんとする最も危ふき其處へ宿蒐りし一個の力士が迫よ其れと見るより章駄天乃如き走り來りお登代が帶よ手なかけたる角田軍次が頂を掴み曳と聲かけ投つくれば是れはと驚く大貫猛が刀の鐺りを緊と把り力を極めて捻倒せば投つけられし角田軍次が已と云ひつゝ起上り看れば力士が仁王立に寄らば投んと身を搆へ未其勢ひに辟易して脱だる草履を拾ひもあへず雲を霞と逃去けり

其十八

登時力士は亂されし姿をつくらう於登代よ向ひ更たと思ふには有らぬ共夜路を行よ若い女中れ一個は大膽千萬此恰好吾が通り掛り過ちのなかつたれ卿の僥倖復度亂暴者の來ないうちよ速く行のが宜からうと道へば お登代い嬉しさよ力士へ諄々禮を述べ立起らんとする折しも雲退く月よ思いずも互よ顔を見合して句ヨゝ卿へ河運のれ嬢様か句具よ其方はれ戻り兄駒勇闘 句然うまてマア お前様よい今頃何處へれ蹈の積り句サア是には深い様子がわつて實い邸を脱出しまーた句其は飛んでもない次第其譯をば承まはり不肖あがらお協議にとなりませう併し何をいふよも此首い往來何處で緩々お話說をと打連れ立つて前に立ち嬉て郭外なる丁子屋と云へる酒樓よ誘ひ最と奥まりたる一室へ請じ再く仔細はと尋られお登代は堰來る涙を拭ひ家の隙ぎはれ辰から定て聞いてお出であらうが父様の横死より引續いて家内の者へも嫌疑かゝりて閉門中如何なる天魔が魅入しか毋様は御家老の岩崎肇と密會の淺ましい場を見認しゆゑ他事よまてお諫申ゝ其れが御意に逆ひえやら居るよも堪ぬ責打擲お辰が禁むをば俱々よ其方い娘と肚を合せ繼ぎ毋と見くびつて根もなき事を言觸し覓よは毋を當夜から追出す積か爾もあくい自滅をさせる了簡でわらうとお煮辟みし無理難題强ては云へぬ義理の毋樣只あつて家の爲めなれば案ては置きぬ不義乱行特よ根人い一藩の上に立べき御身分よて最と淺間しき擧動ど思ひ次けて食事さへ咽へ通らぬ憂苦勞甲夜も寐々お諫めしゝよ然う小蒼蠅言れては生て居るより死ぬのが增と裏へ駈出し井戸の裡へ身を沈めんとなさるゝゆゑ威しと知れど抱き留め最う此後は申しませぬと賠詫て稍う濟は爲た

れど所詮直らぬ御行跡人に指示笑いれんより冥途より座る父様の御傍へ行ひて分疏とたつよを知らせず邸を脱出去來る途よて今の様よ家中の者か捉て淫ふ事よ及ぶもやつぱり母様々御家老様の噂を知つたゆゑてあらうと思へば一層死が急がれ石川の水屑となる妾八覺悟てあるなをば死んだ跡よて其方からたつへも能きよ傳てたも遺書さへもせぬ事ゆゑ淫奔事よて身を投たかと思はるゝのも遺憾く諄々其方へ頼みまするとぶ云さして泣沈めば駒勇は打駭き初て聞いた後室様八御氣質よ似もせて卿を打擲折檻何うも合點がまいりませぬ吾等は素より何んよも知らぬど彼家老様との不義密會は深い動靜のある事でせう親公と家の爲を思ひ死なうと思召したのも無理ではないが死ぬのは早いマア左右も吾等八家までお臨なされませ母とも談合至したうへ如何とも御安心の方へつきませう夜の更ぬうち是から直ぐにと勸め駒勇へ人目を厭へば駕を備ひて是よお登代を乗遣らせ國府町なる吾家を投て急がす途中札の辻の原の蔭より顯れ出て去兩個の男は駕の前よ立塞かりて大音よ此駕やらぬと呼かけたり

駕を遣らぬと立塞りし兩個の漢を駒勇が何者あるかと看てれば城下よ名高き磯落口野晒熊次と其乾兒猩々徳といふ者ゆゑ駒勇は不審に思ひ。御用あつて和郎衆は吾の行途を禁めさつしやとる道ぱ熊次へせゝら笑ひて。何用とは駒勇餘んまりしらを切過るお詳細い丁子屋の裏から潜んで隨子越よ悪皆種はあげて仮た繼子苛めて逃出した駕の娘の郡のお登代詩の語の道はずよ已よ渡せと無法な辭よ駒勇く駕を圍ふて身擂なし仔細も云へず埒不遂よお孃様をば渡せと云ふのは再は汝等は後室様からオヽ知れたあッた今神娘が云々だから行方を探して連て來よと未亡人よ頼まれ出蒐けた路にて大貫角田八兩旦郡よ行逢つて所きやア馬勇が其娘をば伴て云つたと様子を知つて突留た儲けの花の丁子屋よて母の慘酷の私語まで知つたうへよは許されぬ娘は此方へ貰つて行ひだと兩個齊一棒鼻を押戻さんと立書よア駒勇は冷笑ひ。然う所ダうへへ尚の事汝等に渡して堪るものか夫れ共逃れて行氣なら已の體を連れて行けと云ひつゝ前に進んだる猩々徳の胸の當りを右手よく突ば兵兵ながら四五間向へ尻餅搗て轉れたり是を見るより野晒熊次は邪广な汝からしまつてやらうと腰よ帶たる强刀を拔く手も見せず切つて蒐れば駒勇も心得たりと拔合去て丁と受留め四五合討闘

ふたり此時月はまだ雲に蔽れて闇とありけらし昇夫等も心を冷せばお登代い怖さ恐ろしさ今更其場へ出られもせず壁を立てんも如何かと駒勇の身を案じ居たり兩個は互ゑ透し見れど駕ゑ添へたる提灯さへ消て四下も分ざるゑぞ只手下をば氣遣ふばかり折から晴るむら雲に再度刀を打合せしか駒勇い舁夫に向ひ此首擔はねば其駕は少しも疾く吾が宅へと道ふゑ心得行かんとするを投つけられたる猛々徳が稍く起て後棒の帶際把つて引戻し頻ゑ爭そひ居たりけり

其二十

不題植木師彌之助の母妹い卯太郎の報知ゑより測ふず聞いたる彌之助が横死ゑ兩個とも更ゑ正氣ハなき入るばかりを卯太郎が勸め慰めて涙は亡者の爲めでもあいからマア氣を靜めて佛前へ香華ゑても手向けるがよいと勵す辭に母娘い稍く顏を仰げは爲たれど木から落たる猿同然當惑限なき体を卯太郎も道理と思へば百般介抱なしたるが翌日ゑ至りて母れらく い俄頃ゑ重症ゑ劇變して沒去ぢめゑお辰はいよいよ歎きを增し母の死骸ゑ取縋り降り案てられ去身一ッも俱ゑ死なんと嚮ち泣くを卯太郎が精悍しく立ち廻り村の甲乙を奬勵へ老母の葬送を營みしが斯く交々ゑ憂事の起るゑつけて向後も如何なる難儀に遭はんかと安き思ひもあき折から某日卯太郎は遽だしく來りて道やう今朝鹿田屋のん郎藏どのが來て內々ながらと話說をするゑは飼家老岩崎樣ゑは未だ立腹が竭ます彌之助母妹ともゑ引致來よとの吩附があつたが聞けば母親も死んだとやら親と兄とゑ死別れて居る妹を慰れて歸るのも無慈悲ゑ譯ゆゑ乾盃が稍く勸解ては置たれど可憐や妹が引致ゑあらねば宜がと聞いては私も氣が氣でなく其首で熟々思考ゑ所詮和女が當地ゑ居ては目を注けられてみちめを見やう其れよりは大坂ゑ居る老母ゑ弟嘉作の許へ遣げて行のが身の爲めであらう然し女公の一人旅特にい若い身乃上ゆゑ路次の事など案ぢられゑ恰好吾もまた大坂へ出懸る用事のあるなれば女房ゑも話し彼地まで吾が送つてやるほどゑ明日の夜當地を出立なー本街道い御家老が領分地內が多いから伯州路を往とまて成たけ人目ゑかゝぬやう吾が宅から駕ゑ乘り御領地堺まて行が宜と殘る方なき信切にお辰い嬉しく卯太郎が辭ゑ屬ひ三個四個乃家財を沽て母と兄乃位牌を肌ゑ身准備なし嬬て翌日卯太郎方へ來たり此より駕ゑ乘られて卯太郎が附添ひ黃昏に家を出で夜路を幸ひ伯州路の追分と云ふ札の辻へ投かゝりしは駒勇と彼野師

が扱合せお登代を渡せ渡さぬと挑み逢ふたる最中なるが是より如何なる話說やある所と且繪詮に顯すものから次回を讀みて知りよまへ

其廿一

折も空は雨もよひ月は全く雲に蔽はれ星も光りを失ふ中に光るは熊次と駒勇が鬪ふ刃の火花のみ猛々德ハ駕を遣らずと立ち塞りて妨げ居たる此へ舁き來るまた一挺の駕はれ辰を乘せたるなれど其れと知られバ猛々德は之れをお登代が乘つたる駕よと思ひ違へて引留むるに乎籠夫は駭き突放し脚を速めて行かんとする此時お登代を乘せたる駕夫は稍く隙を後たりし故走り出すを最前より窺ひゐたる野晒がソレ遣てはと退起る駒勇はまた猛々德の禁むる籠おそお登代乃乘りたる籠なんめりと思ふまゝ闇がりながら手探りに德が首筋引掴み曳と竪して投げせバ這回ゝ漂れ中央へ水音高く陷入つたり籠夫と邪魔の攘きし間にと逸目散に走り行くを馬勇ハお辰と知ねバ道が違ふ乎オイ籠夫と呼はりながら其籠の跡を慕ひ追掛たり恁る噪ぎはありぞと知らず一足後れに來蒐りたる那の卯太郎は出會頭にバつたり權次に突當れバエ、面倒なと頬の邊を嚴しく擲れて苦と駭き轉るゝ間に野晒はお登代乃乘つ

たる駕を暮ふて何處までもと追行きたり思ひがけなき亂暴者に卯太郎は喫驚して起上らんとする手先に何やら觸し物のありを拾ひあげつゝさぐり見るに煙管を添へし懷中持ちの煙草入なであるなれバ何かの証になりもやせんと懷中にまて之れもまた籠の跡をバ追つ蒐け行きし此段落ハ如何る旦く玆に說明さず話頭轉題河窪孝太夫の未亡人道乃は通に背きま事とは知つゝ岩崎肇の心に從ひしは家の爲めまた二ツには亡夫が仇を搜り出し盜賊の汚名を雪との所存成どお登代は其と測知ふねば屬々毋へ諫めの辭を耳荅蠅とて糟子苛めは疾く當家を遁げよかしと口に道とねど心の謎开り此故を如何にといふに禁ハ道乃を口說落し志望と遂げしものなどと左右に娘お登代のありては怒娛しからぬ事のみゆゑ早晩お登代を失いんと竊に道乃へ寢物語をせし事あるにぞ道乃は深く駭くものから陽は最とも同意の体に走賣殺さんか毒害せんかなど怖ろしき性根なる如く岩崎とは語ひ居たれど口と意は裏表遁げ出だせよ疾く走るべしと辛く當りて有しうちは竟にお登代は出奔をせまかバ稍く胸と落ゐれど故と其失とざり走と遺憾氣に岩崎へ語また下女おさくへハお登代の行方を知て居やう左おくバ何處にあるか搜し來よと難題を言かけ邸にはをられざるやう爲悪れどもお作ハ

また深き所存もあるべし邸を下らず什居たり頃反彌生中旬も過ぎ一日岩崎は河窪方へ來り扨當家處分の儀よ就ては段々吾より歎願を入

稍く家族よは御咎あく河窪乃家名無事の御沙汰有事よ決れバ敢

近々吉報乃有ハ必定なり、今日ハ久々石上山の花觀事を思ひ起つたれバ勝

も俱よ同伴べし花も開き家名も開幸先の好遊歩なれ

バ誘ひ事と聞ばかりに勧められ虚實は知ど楽だる家名ハ無

連れだからに毫は心歡まれて岩崎と共よ打

きし後ち石上山よ向ふたる花見の茶屋へ趣

譯と筆癖あがら次回に記さん　其　廿　二

の話説と絵樣の

夫れ石上山乃櫻花は往古毛利大膳太

夫大江朝臣輝元卿が當地を領しあり

たる頃大和國吉野山より數樹の櫻を遷し植さ

せ之れを培養して年々歳々土地を開いて公衆

の觀場とも竟に小吉野の字あるよ至りしなる

るが這は彭本居翁の詠ぜられたる數歌のやま

とおゝろを人問ゝゝ朝日よゝほふ山櫻花と云へるよ齊一勤王愛國の精神を表さるゝの意なりと聞えぬ恁りしほどよ文久年間に至りても花咲時は城下は勿論遠近人の群集りて眞実歳れ居るが多し當山よ沿ふ一朶の流れを石上川と稱し數線の支流ありて末い石見の海に入ぬ爾る程よ岩崎筆は道乃を伴ひ此川岸よ在る臨花亭と云る料理亭よ上り酒びの遊興なれど故と供人等い城下内よ待たせ置き其身は道乃と只兩人なれど元來人目を厭ふ身ゆゑ故と奥まりたる座敷よ入り花を眺望て須臾は酒酌替し居たりまが肇は太く酩酊して其場よ絶ぬほどよなり恁る体にて飯宅も如何一睡して醉醒せんと枕を取り寄せ横になるバモシ轉寐い御身の毒と道乃い傍よ脱き棄てある外套を取つて腰の方よ被せ掛る間に早高鼾正体もなく寐入し容子を篤と見すまし密とまあがり床に置たる書函の中より把り出す肇の懷臺弾き鎖の金物を外す手さへも慄々ふるひながらも忍を鎖め裡より出ぢを一張の書翰を被き讀下し打駭きたる面色にて復採返さ讀み直す此時まても熟睡せさ肇と不圖眼覺して看るバ道乃が此体あるよそ之れも駭き起あがり卒然よ道乃が讀み入る書翰を奪ひ取らんと立かゝれバ婦人い見認られしと思へバ書翰を持つて遁げんとするを逐さゞ襟髪無手と把り膝下よ曳据動が

せねバ道乃い故と聲震はせ□○採を破り身を棄て仇し枕を書まゝからい妾よ道慮は入りませまい面白さうな艶文と思つたゆゑよ讀んで居るを貴郎は何んでれ留め遊バす再ては御心髪りにて他よ增す花が御座りまするかと道へは肇い冷笑ひ。一時の眺めに手折し花素より油断致さぬ其の方吾懷中の密書を奪ひ遁げんとあもあそ不敵なれ此一大事を知るうへは悟然ながらも生未置かれず覺悟致せと云ひ放し傍の刀を抜くより早く切つて蒐れバ道乃も屈せず云ふにや及ぶ此密書よ記せー如く若殿を害め奉らんとする大悪人特よい其夫孝太夫の仇と知れバあはの事勝負は此方も望む所と准備の懐劍拔んとするを小癪な婦人と思よて蹴倒し肩先一太刀切下れバ苦といい云へど屈せぬ道乃川岸に沿ふたる樣よ倚り手よ持つ密書を押戴だき神明佛陀や加護あらバ此書忠義の人々の手よ授させたび玉へと心に念じ川中へ投棄てる時吹き起る風は忽ち該文を卷あげまたい吹れろさ飛び行く折しも川筋を下り來たりし樵船の中よは船子一人と齡を知命を過ぎしかと思ふ法師の乘りてありしが今風よ遮れ舞ひくだりし文は行脚の旅僧の笠傍りへ落たりけり

町續きとは云へゞ仮に野面より近き城下豊頭萱葺屋根の軒を傳ふ夕顔棚の下涼み男はてゝら女い二布の其れよはあらねど是もまた雄より遠慮い内緒話し親子は膝を合せながら駒勇は脱又き尊思の顔を稍く仰げ妹お作より對ひて道やう句旦那様が横死あされ其譯さへ知るぬうち御心からとい云ながら後室様はまた岩崎様の密手に罹つて果敢ない御最期御嬢様い先々月の末の夜測らず途より御出逢申志運て皎らうとした折柄野酒機次が後室様の嫌みを受たと途中の乱暴支へられるうち來合した籠い當時御嬢様を乗たる籠と思ふゆゑ吾家へ連て歸つたうへ裏より出せゞ御嬢様よはあらで植木師彌之助乃妹のお辰如何さた譯かと仔細を聞くより兄は恁々の事よりして忠五郎乾分より責殺されまた骨親も殺なつたが遣つた此身を御家老から召捕より來と乃噂を聞き卯太郎殿とやらが伴乳より大坂より居る伯父の嘉作の家まで送つて行く處と委細は聞れたがれ嬢様い權次の方へ攫はれたかと心ならねゞ直より飛出し捜索爲たをど暮れ行方の分らあいのい何處遠くへ往つた事かと案だん だ踏でも跡の祭り設またお辰どのを送つて來た卯太郎殿が間違て籠より引添ひ往かれたか夫れなら御身の志へあー我よまても四五日を經たら動靜が知れるで有うと只管お辰どのを吾家より止め二日三日と過ま

うち持病の癪より腦まされ起居も不自由よあつたゆゑ慈母やお辰どのゝ介抱うけて辛うと快癒た日より和女が來て詳細聞たお家乃噪ぎ正直一徹の旦那様い竟より盜賊の汚名を帶び未だ其れ耳か後室様は發狂故より手討よしたと御家老の御屋敷にて河窪の御家は全く斷絶同然渾て乃舉を支配あさるゝ笹間様い那乃大病已の父は孝太夫様を命の親と存命中は口癖より云ひ續けしゆゑ父より代つて其萬分の御恩報ぜと和女をゞ御事公より遣り已もまたお邸の方へ向けては臆さへ出さず御家内安全長久と祈るより甲斐ない遣回の一件双方四方の話を聞き熟々沈吟をすれゞするほど疑惑いしいい御家老より假令規則を破りしよもせよ傳植木師一人を責殺そと苛酷成敗また現在盗賊の汚名より謹慎を命ずてある河窪の後室と密通し何が心より背たかは知らねど發狂人と云做て場所もあらうよ石上の臨花亭よく手討とい何程先殿の御妹公を奥様より貰あされた威光と云へ御藩中の棟梁とも仰がを玉ふ御家老の御擧動とは思はをず察する處後室様が操を破つたなさを方も深き仔細のありまならんが今とあつてい死人に口なく是非もあしとと云ひながら後室様の譯は御家老爲と勘靜を捜つたうへては其儘よしては置れまいが何かよつけて肝腎のお嬢様の御行方が知れぬよ故てい御家乃爲よもなるま

いから其れが第一心悪りと兄の辭よお作お辰と顔見合し後の話説い次回調亞ぐべし

其廿四

兄の辭よ妹れさくは涙を揮ひ道へるやう今更追ふても叛らねど斗も河狸の御家が斯まで噪ぎよ至るといふ其顛末を質を時はお嬢様が彌之助殿へ懇願をなされ其とが爲めよお氣も鬱陶て苦世〳〵と物思いしき顔色ゆゑ設もの事はあつてはと思ひ過した心から道ならぬとと知りあがら其お周旋をせんとしたのを早晩旦那様よ見認められ恁々して彌之助を呼出さ來よと乃仰をうけ普請小屋へと行途よて測らず酔酊の仲間衆よ据られて難儀の折から彌之助どのはれ嬢様へ意見をせんと小家を脱出し追かゝつて妾を扶け供よお邸へ戻りい爲たれど當時お嬢様から彌之助殿へ宛たる浮狀を取落した其とが証據で彌之助殿い遂々翌日浮家老様の吩咐をうけて鹿田屋が責殺したと後の評判また旦那様は彌之助どのへ何やら密よ事等ありて奥様は玄めれ嬢様へお知らせもなく其夜のうちにお邸を浮立なされたる跡よ遣りた御書翰よてい至急よ思起つ事あらて京坂助へ赴くとのみ他よ事故さへ知れぬうち思ひがけなや鯉の松の頭よ於て横死なされ剩つさへ御用金を竊んでお遁あさをた抔と御上の疑ひは

れやらず御家は閉門謹慎の數重なる折も折後室様は何時のほどよか岩崎様と共御密會を御諌めあされたお嬢様を細子苛の責折監卑妾も供よ御叱ありて二百目よい飯れ下れと以前の御動靜よ引變て人目も愧ぬ御不行跡其れ等を愛に思召してかれ嬢様は家出ありし其翌日より妾を責め登代の行方を知つて居やう知らずば早く搜ーて來よと無理難題を仰しやれど何首やら鬱々して御座るれはれ嬢様の身をお案事なさるゝお心の裏と曉りしゆゑ假令何様よ仰しやても卑妾はお邸より下りませぬとお辭を返して耐忍して居ま也後室様が御心底また御家老れ御擧動が如何も不審と思ふゆえお嬢様の事も心に悪れど五日七日と經過しゝうち御悼しや後室様は御家老の手よ敢あい御最期竟よい御家も斷絶同然卑妾も只得家へは復れど片時忘ぬ御家乃事今兄さんの云んす通餘りと云ば御家老が我儘氣隨の御處置沒去玉ひし旦那様また奥様乃汚名を雪ぎ大きお聲てい云れぬが特よ寄つたら謀反人とやらを見顯はす事乃あらうも知れぬば那の御家老の心底を開き出す等思いわるまいか夫れよ就いて思ふよい今から卑妾とお辰どのゝ亡御主人の菩提の爲めまた彌之助どのゝ後世安樂を祈りの爲めよ西國の札所を巡り一ッよはお嬢様を索出だま也御伴まて歸り度實は兩人で謀合せ貴兄よ

頼み母様の許可をうけくと思ひますから何卒此儀を聽屆けてと婦人ながらも忠義よ凝つたるわさくの志望を駒勇と母が得心するが否挿繪よ推察いあるべけれど且次回の分解を聞け

其廿五

駒勇と妹とお辰が思ひ起つたる所存を聽き寔よ道理ある其辭吾は得心さまたが何時飯るとも限りなき旅路よ出づる事なれば母の心が酌かねてと過へば老母い首を掉り婦女ながらも武家奉公をさせて置のい斯いふ時よ御用よ立つる亡夫の所存お嬢様の所在をば索てから西國するとは此上もなき宜い覺悟常々香華院へ參詣して說法の際聽いて居る慈航は渡さる衆生もなく慈雲い掩はざる邦國もなき苦を拔き樂を與ふるは佛の慈悲とあるあれば長旅とは云へ兩人の身よ恙あるべき樣もなし跡よは駒勇が居るなとば心配さず旅立してお嬢様をお供さて伴ひ飯るべし哀別離苦い浮世の常必ず忠義を忘るゝなと宛も潔よき母の辭よ駒勇は歡びて許可の出でしうへからと日柄を選みて啓行をせよと聽て准備を整あはせ左右するうちまた一月餘を過ぎ秋の初めよ靈祭る于蘭盆の時とぞなりよけゝ大悲の擬仰なる門途よいよき日ありけりとお作れ辰ハ兩人は同行三人と認めし笈摺脊よ白朔半杖と杓とへ仕込みし短刀精悍しくも身准備の姿を見るより母親は山川ふ氣を注々て雨風の日ば殊更よ大聲をして惱ふなと云ふも曇りまた泣顔を咳よ紛らす氣丈の母親駒勇は諄々も設道中よて病病よ囑らば別人を立て報知て來よお嬢さまと索出だそまては努々短慮な事をすあと言含めて門送り兩人も宛然堰來る涙を禁めながらに暇乞去らばさらばの聲を殘し引分れ行く親兄弟之れ乎一世の別れとは後にぞ思ひ知られける話頭分顯岩崎肇は曾て反逆の一味者たる江戸邸詰の用人浦壁重藏へ宛て八橋計畫の一條よりして彌之助れ事及び孝太夫を暗殺さゝ顛末を文認め近日腹臣の者が出府の砌持たせやらんと思ひ居さ折柄石上川の臨存亭よ於て河瀬の未亡人滝乃よ見認められ只得其場よ於て滝乃を斬殺い爲たれど滝乃が該密書を川へ投げ棄てし爲め最と心安からず股肱ぬ臣に命玄川下を搜索させしが更よ分らず爾れども名よ負ふ急流ゆ為所詮止りあらざるは必定と聊か安堵はあせしも乃ゝ萬一此事もやと思ふの餘り俄頃よ忠五郎へ内意を含め工事を一層急がせてまた同盟中の一人ある海野主計よ江戸表出張を命玄浦壁重藏と謀り御後見たる鳩翁公また松倉丹下等を失ふべしとの計略を授け立出させ尙ま惡事ハ根を堅め居たる心の裡こそ怖しけれ

夫れ人は定業不定業非業不非業のほかゝ出ず小笹の露草ゝ消ゆる命あり樂天の詩ゝ曰く行路の難は水ゝ在らず山ゝ在らず只人情反覆の間にありと宜なる哉駒勇次郎吉が父次郎兵衛が孝太夫ゝ享し恩儀のあるなれバと妹おさくを同家へ奉公住させ其身と母ゝ家ゝ在りても同家の無事を祈し甲斐あく奸臣岩崎肇が爲めゝ孝太夫は盜賊の汚名を被り横死を遂げ道乃は貞操を破りたる深き苦肉の巧劃も曠しき耳か剩さへ狂人ゝ名を負ひ乃の下ゝ斃れ娘ゝ登代ゝ繼母が所存を知らねバ自ら家を奔り竟ゝ河窪の家名斷絶の沙汰ゝ迫びしは寔ゝ古人ゝ云ひし如く生死ゝ賢愚邪正ゝよらず顏回は短命にして盜跖ゝ命長きの道理亦是非もなき事なるが妹おさくゝよかせつゝお辰とゝもゝ目的あき旅に出しやりしも踪跡知れざるお登代を索ん爲めなれバ駒勇も折々は城下に至りて彼野晒權次等が立飯り來しか如何と穿鑿せしに渠は猩々徳と共ゝ江戸へ出立するとて當春出立せしまゝ未だ飯らずとの風聲なれバ再ゝ彌よお孃樣を奪て逃しものならん此趣きを母ゝも告また岩崎が動靜を探偵するゝ近時は倍々奢移ゝ耽り一家中の者も當主富丸君の許へ勤仕するゝ先立ち旦岩崎の邸へ伺候するが如き景狀ありて甚だ去きゝ岩崎の邸へ耳出仕するを務とするの愛そわるに忠わる者は竊に之をを憂ふと雖も河窪家の体爲くを見て慌れを怠く者多きが爲め陽ゝ諂諛をそる程ゝ志士もあけれバ我慢は漸次に增長したるを見聞ゝつけて駒勇ゝ國家ゝ奸賊主家の讎敵吾一身ゝてあるおれバ突進渠を屠つて其宍肉を喫はんものをと腕を扼して憤怒はすれども古稀近き母親ゝ憂を見せんも不孝の至りと胸を擦つて居たりしが一日次郎吉ゝ近邊ある朋輩の家へ招かれ日の暮るまで雜談し立歸り見ると母のをらねバ頻ゝ嘆べと答もなく只看れバ側の經机に珠數ゝ添へたる一通の手紙のありーを不審に思ひ手ゝ把りあげく上書を看るゝ正しく母が筆の跡ゝて「遊書乃事」ヨ、と駭き駒勇は逆ゝ卷たる文おし拔き讀文体は次回に記さん

其廿七

駒勇は胸轟きながら手ゝ把りあげ去水莖の跡もおぼろの散去書讀下し看る文言は

必いそがれ候まゝあら〳〵書殘し申候治郎兵衛どの死去の後くれ作を河窪の浄家へ奉公ゝ差出てよりゝ萬事ゝ和子一個が心勞ひ老耄ー此母へ孝行を盡され殊さら河窪

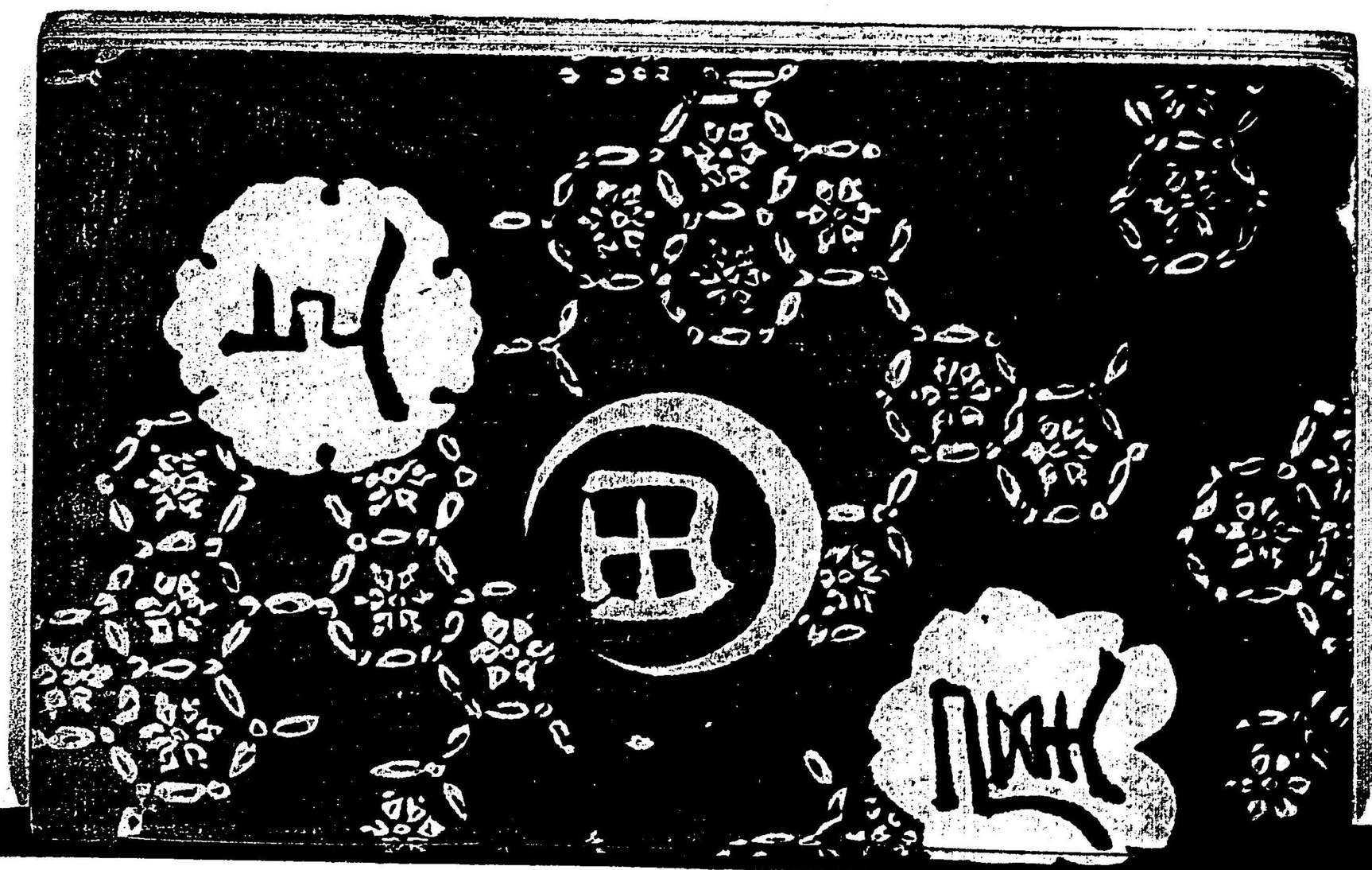
の騒動の以降は一ちゃ屠も配も彌き候事と思ひつゞけ此世よ用なき老の身わらずは和子が心のまゝよ忠義も立ち亡父は勿論御主人方にも御喜びと推し候ゆゑ度々死あんとい存ぜ候へども恩愛の情斷ち難く生甲斐もあき身を存命をり候とあろ此節人々の風聲によをば御家老れ我威專横倍々募り民百姓を後虐壓制の所爲黙からず人々難澁致ぜ候へども誰とて其惡行を諫むる人あきは實よ御國の爲めに歎かはしき事に存しい素より邪にして樂ぜむは麻売の火の如く一旦は熾なるもきゆるよ早くまた心ざま正しくして苦しむは泥砂よ濁る水の如く日を經なば原の清きよあると申せば非除岩崎殿の權勢あるとも不義の榮利と浮雲の便騒いつしか亡ひ失玉くん事ハ目前あるべけれど一日延ぶれば一日の國の憂をまと耳あらんと婦人ながらも絶がたき思ひをり候よ遠も和子い此事を思ひ起されいと昨夜竊よ獨り言を立聽き嬉しさの限りなくいを ども萬一毋への心殘りありてはと思ひいまゝ惜からぬ命を棄て和子の忠義ある委細へ

冥途の夫に告げ悅バせんと其れを樂しみゝ今夜井戸に身を投げ相果申し只不便なるは娘れさくゝて野を過ぎ山をうち踰て露ゝ宿り風ゝ梳づり狎も習はぬ草枕旅寢の憂の不在の間ゝ母と兄とゝ別れおばお登代樣を伴戻り候とゞ無遺憾に思ひ歎き悲きゝいんと是耳未來の障ゝし和子ハ御國の爲めまた二ッゝは御主人方と母の仇と思ひ兼多ゝ代つて身を棄て禍災の根を斷ちおさるべく候申し殘し度事は山々ゝへども本望遂げ遂げざるゝ係らず跡より來る和子の身と存ぜいまゝ妾が所存のみを記つけ置し淳々も未練の舉動ありて嘲笑をうけぬやう潔よく本望を遂げおさるべきし涙に墨のよちり除ゝ候まゝよろしき傍判じなされ度しゝ

次郎吉どの　　母ゟ

詞訖りて駒勇ハ思ハぞワッと男泣雲時は顏を得わげざりしが稍うゝ涙を揮ひ再は昨夜の獨り言を察し玉ひて身を棄られ此次郎吉が忠義をバ立てさせて下さりますかコレ母人聽て岩崎の首を取り其塲を去らず腹を切り直ぐゝ冥途へ參りまする設また爲損じ捕られても決て未練な舉動なく潔よく最期を遂げませうとは云へ非業の御身の果是も正ゝく岩崎の爲ず業今ゝ念慮をはらして呉んと怒氣は忽ち髮を衝き向ふを白眼立つたるは物凄くこそ思はれけれ艢て心を取直し母の死骸を井戸より引揚げ近隣の人々をも喚集め法の如く葬送を濟せしが一七日間ハ我家ゝ引籠り八日目を俟ち佛室ゝ備へゝ位牌ゝ添へ諸道具は殘らず香華院へ預け妹が飯り來し日ゝ渡し呉れよと依頼置き其身ハ近國の興行ゝ出掛けると云做し再家を立ち出でゝ岩崎を覘ふ便宜を窺ひまゝ八朔の賀に登城の歸りを追手門の邊ゝ埋伏して討取んと其日を俟ちて緊舉ゝ追ぶ其の趣きは繪樣ゝあれど且く次回の分解を聽くべゝ

其廿八

思ひ立矢の石見潟濱邊の浪やうたかたの泡と消ゆく覺悟の狀夫忠義ゝ凝たる意の駒勇手綱の其れおらて浴衣ハうへに繩襷角力の身ゆゑ刀物よりはど家ゝ有あふ六尺餘り五寸經の杉丸太を右手ゝ携へ城山ある追手の門に最近き日暮と稱ぶ土堤の頭に岩崎遇しと待居たり頃及文久三年八月朔日城中の御機に成て報する卯刻の太鼓に連れ諸士ハ追々登城なゝ已の刻の太鼓を信號ゝ就れも下城あしたるが當主富丸殿は先つ頃より二豎に罹らせ玉ひしゆゑ本日の御式にハ臨ませられず執權岩崎殿公ゝ代つて一家中の拜賀を享け式滯はりなく相濟し

と付例規によつて在江戸なる御分家鳩翁君へ祝賀乃御狀を發せらる岩崎是れを檢閲を嘗て御病床に就き此旨を具陳し下城なせしい御檜よて未刻の太鼓を打出す頃なり恁て轎子の左右よい三人の壯士扈從し追手門を出ゝ二三丁を來り日暮の土堤へ投棄らんとする折から待設けたる駒勇は該杉丸太を眞向に振翳し奸賊岩崎承まれ天に代つて駒勇か汝を此首に誅戮なりと云ひつゝ駕脇の武士を横に薙ぎたる必死の力キヤッと叫びて鼻口より出血あして倒るれば驚破泥藉よと殘る兩個が刃を拔いて切て蒐るを駒勇い杉丸太よて丁と受留め闘へと目的相人の岩崎を取逃してはと思ふものから小便が遠くも注進せしよど卒其泥藉者を討留んと岩崎徒黨の姦臣等が追々該場へ駈着來る恁る中よも岩崎は轎子の戸を開きよ耳よて外へも出ず泰然と刀の反打寄らバ切んと身構あしたる容子を看るより駒勇は倘令此場よ切斃さるゝ共渠を遁がして協ふべきかと數ヶ所の負傷よ血は滝津瀬浴衣を染むる幹血の苦痛よ構まず數人を敵手に奮擊突戰おきたるゆゑ此棒先よ觸る者い一人どまて起る者なし爾を共敵は大勢なり殊よは新手は入り替いり立替り得物〳〵を携へて立ち向ひ來る事なれば暴よ暴たる駒勇と漸次よ力屈り行し此段落は如何ならん